

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第36回 日本人はなぜ「幸せ」でないのか

1. 日本人は「幸せ」でない

2012年8月、ブータンの若き国王夫妻が訪日した。そのときブータンは「世界一幸せな国」と紹介され、話題となった。では日本はどうかだろうか。

生活の満足度、幸せ度の国際比較はいろいろな機関がさまざまな形で調査している。その結果は時々新聞の囲み記事などで発表されるが、諸外国に比べ日本人の満足度、幸せ感は毎回極めて低い。先進国の中でも低く、生活レベルが日本よりもずっと低い発展途上国と比べても低い部類である。

一例として私の手元にある中公新書の「日本人の価値観世界ランキング」（高橋徹著）を見ると、そこでは電通総研の調査結果が載せられている。

「現在幸せだと思うか」との問いに対し、日本は74か国中29位だ。1位はアイスランドで、以下アイスランド、カナダ、オランダ、スイス、ノールウェイ、オーストラリア、デンマーク、インドネシア、プエルトリコと続く。12位アメリカ、17位フランス、20位台湾、21位イギリス、26位韓国、これらが日本よりも上位だ。

ただこの本の調査結果はいい方で、2008年にイギリスの研究者のおこなった調査結果では、世界178か国中で90位という惨めな結果だった。これは当時のマスコミで話題になった。

このような調査は、調査の仕方や質問の仕方でも結果は大きく異なるが、満足度、幸せ感の調査では日本は常に低位置である。日本社会は失業率が先進国の方で極めて低い。それでも幸せ度は低い。生活水準が日本よりはるかに低い国と比べても幸せ度は低い。日本人は精神的に満足できていないようだ。

2. 日本人のイージーライフでは「幸せ」になれない

日本人は「和」が大好きだ。「和」は依存と保護、もたれ合いの世界であり、巣立ちをする前の幼鳥のように、実に居心地の良い心的状態である。日本人は「和」の中で大人になる必要がなく、何時までもぬくぬくしていることが許される。とことん甘やかしてくれるのだから日本人は幸せ度で世界一を争っていないはずであるが、実際は違う。日本人は自分の人生に満足していないのだ。

幸せ度ランキングの上位の常連は、北欧諸国やアングロサクソン系の国である。これらの国に共通しているのは、「甘え」が無いということである。英語には「甘え」という言葉自体がないというのが、「甘えの構造」の著者である土居健郎である（本稿第1回）。

人間は17歳ころに、「自分は何をするために生を受けたのか」、「自分は社会に出たら何ができるのか」、「どのような仕事をすべ

きか」などと考えはじめる。人生で最初の「自分探し」をする時期と言ってよい。「自分探し」は親離れして自力で生きていくための重要ステップなのだ。

北欧諸国では高校から大学にそのまま進学するのは10%程度で、多くは仕事に就いたり外国に出たりする。そして、自分が何を勉強すべきか明確になつてから大学に入る。他の地域でも、30歳ぐらいまでは何べん転職しても問題視されないようだ。その間にキャリアアップをし、自分は何ができるかを確かめる。この傾向は先進国では一般的である。その結果OECD諸国では25歳以上の大学生の平均は22%である。

ところが日本では25歳以上の大学生はわずか1・7%であり、極端に少ない。なぜかと言えば、日本では自分探しをする必要はなく、どう生きるかの人生コースがあらかじめ用意されているのだ。

高校生に対しては、「余分なこととは考えずに受験勉強に専念して、いい大学に入りなさい。そうすればいい会社に入れて、バラ色の人生が待っている」と繰り返し教える。大学に入つて少し遊んで、すぐ就活である。

企業は世界に類の無い新卒一括採用主義で待っている。就活のスタート時期も決められていて、決まったりクルートルックを着て会社参りに専念する。25歳過ぎた大学生などというのは、

日本では人生コースから外れた「落ちこぼれ」ということとなる。しかし、20歳を過ぎた人間が言われるままに行動するということの異様な現象は日本だけのものである。

入社すれば新人教育と称して社会人としての教育をしてくれる。人生は全く「あてがいぶち」だ。新入社員は純真で素直に吸収する人間であることが期待される。「自分探し」のような生意気なことをする若者は社風に染まりにくいので好まれない。日本人は親離れしていない未熟なことが理想なのだ。25歳過ぎた大学生など卒業してもフレッシュマン扱いをされない。

入社後は年功序列と終身雇用が待っている。能力と実績で競争するのでなく、年功が重視されるのだ。まじめに言われたことをこなしていればよい。「指示待ち人間」で十分だ。もつとも、経済の停滞の中で終身雇用は維持できなくなっている。しかし、新卒一括採用主義、年功序列は揺るがない。これも世界に類例が無い日本人だけの世界だ。

日本人の人生はこのように「あてがいぶち」で、「指示待ち人間」で生きていける。まさにイージーライフが許され、他の国民に比べて実に恵まれている。ならば日本人は「世界一幸せ」な民族になるはずだが、実際は全く逆である。イージーライフは人を幸せにしないようだ。

3. 何が人を幸せにするのか

あてがわれた人生であろうが、自分で探し求めた人生であろうが、現実の人生は自分の思い通りには進まない。その時、あてがわれた人生であると、「上手くいかないのは、自分のせいではない。人のせいだ」、「こんな人生を与えた社会が悪い。政治が悪い」と思うようだ。あてがわれた以上、悪いのはそれを与えた社会や政治だと思うのは、確かに自然な心情だ。

他方、自分で探し求めた人生の場合、悪いのは選んだ自分ということとなる。ひとのせいにはできない。自分で試行錯誤して選び決断した人生だからだ。しかもこの場合、次のステップは自分で改めて探さなければならぬ。社会が悪い、政治が悪いといつても、次のステップを社会や政治が与えてくれないからだ。

ではどちらが「幸せ」かと言えば、自分で選び、人のせいにはできない厳しい人生のほうがよいのだ。人間は、自分の人生は自分で探し、「自分で判断し自分で責任を負う」生き方のほうが幸せ感を抱けるようだ。

人のせいでできるイージーライフでは、人は「社会が何とかしてくれるはずだ。政治が何とかしてくれるはずだ」と甘えてしまう。が、実際は社会も政治も何もしてくれないので、不満だけは蓄積し増幅する。其の結果、日本人の幸せ度は極めて低いこととなるのだ。


4. 日本人はサムライを指せ!

かつて日本には「あてがいぶち人生」など無縁で、「自分で判断し自分で責任を負う」厳しい生き方を求められた時代があった。それはあの戦国の世である「サムライ」の時代だ(本稿第5回)。

「サムライ」は16才くらいで元服し、戦場に出ていった。戦場では「自分で判断し自分で責任を負う」のでなければ、いつまで首を取られてしまう。「サムライ」は、16才で親離れし、一人で厳しく生きることを求められた(本稿第33回)。その「サムライ」の時代、日本人は経済力を高め、同時に海洋民族の如く世界に飛び出していった。日本人町が南方のあちこちに作られたのはこの時代だ。その時日本独自の文化も高度に発達した。

この「サムライ」の時代、人は今の日本人よりもずっと人生に幸せ感を抱いたはずだ。それゆえ、日本人は再度この「サムライ精神」を目指すべきである。そのためには二十歳の成人式など廃止して、16才で元服式をすべきだ。そして、若者をどんどん海外留学させればよい。

なぜ留学かといえば、今の日本の中学、高校教育は徹底して従順なサラリーマン養成を目的としている。そこでは、「サムライ」は育たない。しかも、今の教育官僚の意識は教育勅語時代のそれをそのまま受け継いでいる。これを変えるのは近未来において是不可能に近い。となれば日本の若者を「サムライ」にするには外国に放り出して武者修行させるのが手取り早い。



金子博人
(かねこ・ひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。

次に必要なのは、海外で武者修行した若者を受け入れ、活躍させられる日本企業だ。それを用意するのは今の大人の責任である。しかしそのためには、日本の企業が、年功序列、終身雇用、新卒採用主義、稟議制などの日本的システムを放棄する必要がある。

だが、これはその気になれば難しくない。なぜなら、これらは本稿の第16回で説明したとおり、戦時体制の中で形成され、それが戦後引き継がれたに過ぎない歴史の浅い社会システムだからだ。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。